

茨城県新治村におけるコミュニケーション 空間に関する地理学的研究

高橋 伸夫・田上 顯・斉藤 一彰

- | | |
|------------------------|--------------------------|
| I はじめに | IV-2 生産年齢層によるコミュニケーション空間 |
| II 調査対象地域の概観 | |
| III コミュニケーション空間の形成者の類型 | IV-3 専業主婦層によるコミュニケーション空間 |
| IV コミュニケーション空間の諸類型 | |
| IV-1 老人層によるコミュニケーション空間 | V むすび |

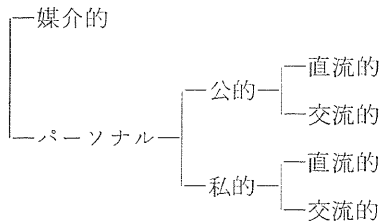
I はじめに

コミュニケーション (communication) なる概念はきわめて多義的であり、この用語で記述される現象は多岐にわたっている¹⁾。しかし、社会的なコミュニケーションとは、人間 (送り手) がなんらかのメディアを用いて他の人間 (受け手) に知覚・感情・思考などを伝える過程²⁾とされている。このような行動は、社会の基盤をなすものであり、社会は、構成員の感情・経験・欲求・知識・意図を他に伝える個人の能力のうえに築かれている。したがって、コミュニケーションという行為に対しては、社会学・心理学・言語学・文化人類学などの多分野から研究が進められてきた。

ところで、人間はそれぞれ自らが有する環境に対して行動をなし、生活空間を形成している³⁾。生活空間は、人間が自ら移動して自己のものとして形成される場合や、あるメディアによるコミュニケーションによって自己のものに組み込まれることもある。このように人間の生活空間を形成する行為は、多様なものを内包している。生活行動を体系化する試みはいくつかの分野によってなされているが、家政学の分野では生活時間という枠組から分析がなされている。伊藤セツ他⁴⁾は、人間の生活時間を以下のように、4分類し、その結果すべての生活行動を類型化した。すなわち、i) 生理的生活時間、ii) 収入労働時間、iii) 家事的生活時間、iv) 社会的・文化的生活時間の4類型である。それぞれに含まれる生活行動に関しては、地理学からの分析がなされてきた。たとえば、生理的生活行動としては、人間の受療行動が分析された⁵⁾。収入労働行動については、とくに1960年以降に国勢調査報告によって通勤に関する資料が得られたことから通勤行動の研究が進められた。さらに、家事的生活行動に関しては多岐な行動が含まれるが、とくに消費行動についての研究は多数に及んでいる⁶⁾。しかし、社会的・文化的生活行動に属する交際、余暇、社会的活動 (組合、自治会、町内会等) に関する地理学的研究は、残念ながら今日までごく限られてきた。

本論文は、従来、地理学の分野からの研究が少なかった人間集団の行為・行動とその地表への刻印、換言すれば、生活空間の形成過程を社会的・文化的な側面から接近しようと試みるものである。

前述の通り、コミュニケーションは広い概念を有するため、さまざまな態様の回路が存在する。しかし、竹内郁郎⁹⁾が類型化するように、まず、パーソナルと媒介的な回路に大別されよう。すなわち、パーソナル・コミュニケーションの場合には、「送り手」と「受け手」の役割交換が自在に行わ



れ、コミュニケーション当事者は互いに相手からのメッセージをフィードバックしながら、みずからのメッセージを伝達するという、両方向性（two-way）が存在する。それに対して媒介的コミュニケーションの場合には、「送り手」と「受け手」の役割が固定化され、メッセージの流れも一方向的（one-way）となるのが一般的である。本論では、パーソナル・コミュニケーションに焦点を合わせて分析を行う。なお、コミュニケーションは「交流的回路」と「直流的回路」に分けることが可能である。「交流的回路」はコミュニケーションの「送り手」と「受け手」が比較的均等にメッセージが交わされる。一方、「直流的回路」は、「送り手」から「受け手」にほとんど一方的にメッセージ伝達の機会を独占している回路である。

以上のようなコミュニケーションの概略的な類型化をふまえて、本論は以下のような研究課題を定めた。茨城県新治郡新治村大畑新田地区を事例として、本研究は、成人の住民が直接他人と接して成立するコミュニケーション行動によって、生活空間をいかに組織化しているかを究明しようとするものである。このような研究課題の設定によって、本論は農村地域における個人、家、社会的集団等に視点をおき、旧来の地域社会の残存形態と新しい形態への移行過程を考察し、農村地域を把握することに対して、わずかながらの新しい分析視角の導入を試みようとする意図している。

後述するように、研究対象地域はかつては純農村であったが、農家の兼業化が進む一方、新しい居住者の転入もみられる。したがって、上記研究課題に対して、農村部の分析が中心になるが、地域における都市的諸要素の拡大によって、都市部への移行過程をも考察できると予想される。

パーソナルなコミュニケーションに焦点をしばったため、調査方法はコミュニケーション行動者に対して面接による聴きとりを行った。しかし、個々人の行動を基にしながらも、究極的には類似の行動者のそれを類型化し、社会的集団としての行動を理解しようとするものである。コミュニケーションを社会的なものに限定してみても、各個人のその行動は多種多様である。そのため、作業的な仮説として、コミュニケーション行動が類似する属性として、以下のような類型化を試みた。まず、研究対象地域内のコミュニケーション行動者を、i) 老人層、ii) 生産年齢層、iii) 専業主婦、に三区画した。そして、老人層を男性と女性に、生産年齢層を農業就業者、農外就業者、自営業者に細分化した。それぞれの類型を代表する詳細なコミュニケーション空間については、IV章で記述される。

農村部における農家生活には、森川辰夫⁹⁾が指摘するように、時間的リズムが厳存する。生活周期

は、日、週、月、季節、年、数年～10数年、生涯といった重層的構成をもちながら、各個人の生活行動を規定している。各住民のコミュニケーション行動を考察する際には、上記の点を念頭においた。とくに日々繰り返えられる行動については、時空間の視点を強調するための表示方法をIV章で用いた。ただし、コミュニケーション行動者に対する聴きとり調査が1986年10月～12月にかけてなされたために、主として農作業の農閑期に位置し、かつ年周期の年末のつきあいも生じる時期であった。

II 調査対象地域の概観

新治村は茨城県南部、新治郡の西部に位置し、東に霞ヶ浦に臨む土浦市、西に筑波町、南に桜村、北及び東北は筑波山塊により八郷町と千代田村に隣接している。東西4.7km、南北7.3kmで面積は34.12km²を擁し、人口9,232、世帯数2,169（1986年12月1日現在）である。一方、首都東京とは直線距離で約60kmにあり、首都圏外縁部に位置づけられる。

村の中央部を国道125号線が東西に走り、土浦市との境界沿いには常磐自動車道が南北に走り、村の南東部に土浦北インターチェンジが開設されている。常磐線土浦駅までは約10kmで、近接性の高まりによって、都市化・工業化が、首都東京をはじめ他地域の直接的・間接的な影響を受けはじめて進展しつつある。

当村は、旧町村合併促進法に基づき、藤沢村・山の莊村・斗利出村の3か村が1955年7月27日合併して誕生した。

村域の南部から西部にかけての桜川低地は沖積土に恵まれ、肥沃な水田が広がっている。一方、村の中央部は新治台地と呼ばれる洪積台地になり、関東ローム土壌におおわれ、畑地に利用される割合が高い。北部の筑波山塊山麓地帯では、山間の谷底に狭い谷津田が見られ、丘陵地は主に畑作に利用されている。

気温は一般に温暖で、年平均気温は14度前後となっているが、冬季には北西風の影響と相まって干害を受けることもある。なお、積雪は少なく、年降水量は1,300mmから1,400mm程度である。

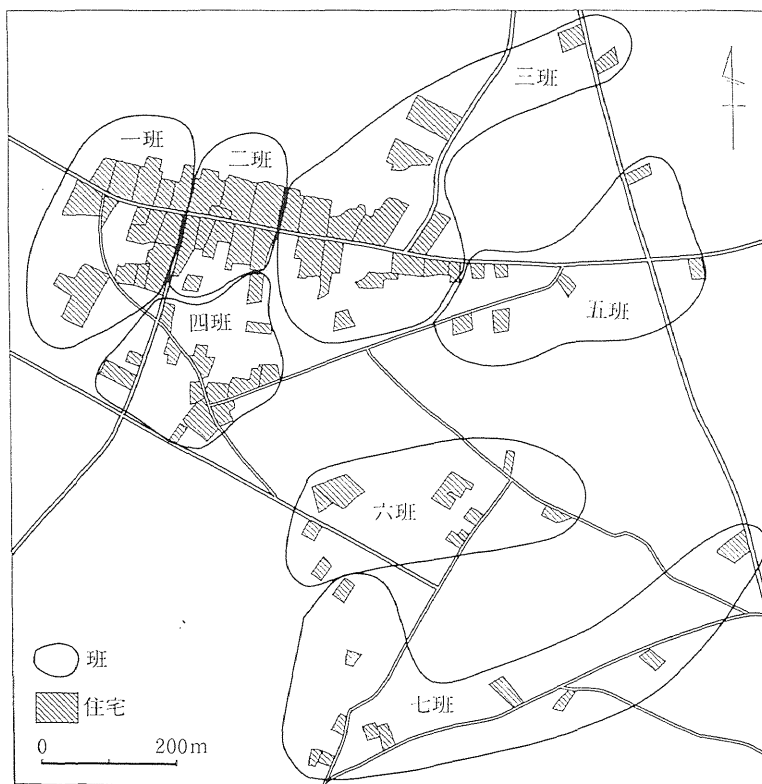
当村の基幹産業は農業であるが、近年の兼業化の進展や後継者不足によりその地位は低下しつつある。当村の農業を概観すると、農家戸数は1,145戸（1985年）で、その内訳は、専業農家率が12.0%で県平均の13.4%に比べて兼業化が進んでいる。第1種兼業農家率は29.4%で、県平均の27.9%を上回っている。第2種兼業農家率は58.6%で、県平均に等しい。また、耕地面積1,440ha（1985年）の構成比は、水田が47.9%を占め、普通畑が22.6%、桑園と果樹園を合わせた樹園地が29.3%となっており、県全体に比較して樹園地の割合が高い。一戸あたりの耕地面積は1.26haで県平均値に等しい。生産額は47億6千万円（1985年）であり、畜産（主に養豚）が約6割を占め、次いで米、養蚕の順となっており、畜産と養蚕に特化している。このように畜産、特に養豚を中心に展開されてきた当村の農業も、土浦市や筑波研究学園都市等の周辺地域における都市化や工業化により農外労働力が析出し、常磐自動車道の開通による京浜市場への時間距離の短縮等の外部要因により、大きな転換期を迎えている。今後は有利な条件を活用して、都市近郊型農業や観光農業に大きく変化する時期を迎えているといえる。

大畑集落は新治村の南東端の平坦な洪積台地上に位置し、平地林と畑地面積率が高い。本集落は、藤沢地区（旧藤沢村）に属し、大畑本田地区と大畑新田地区からなる。さらに大畑新田地区は、新田と前山地区に細分される。集落の形成時期は、国道 125 号に沿って塊村形態を示す大畑本田地区が最も古く、縄文時代の遺跡もみられる。大畑本田地区の北側に位置する大畑新田地区は、江戸時代の1621年に新田開発が開始されて以来の集落となっている¹⁰⁾。大畑新田の前山地区は、かつては平地林が広く分布していたが、第二次世界大戦後に開拓された。当初は、入居者が少なく散村形態を示していたが、宅地化が徐々に進展し集村化した。前山地区には居住年度の比較的新しい居住者が多い。

大畑新田地区は、大畑本田地区から北 500m ほどの洪積台地上に位置する。第 1 図の土地利用図に示されるごとく、集落の南側には畑地が広がり、集落の西端から北にかけては狭い谷津田が開けている。集落の北側には平地林が広い面積をおおい、その平地林の中で梨園や芝畑が開かれている。家屋の多くは、集落内を東西にはしる村道に沿って配列し、路村を形成している。

大畑本田・大畑新田両地区の行政組織をみると、それぞれ 1 名の区長が選出される。任期は 2 年で、1 年目は副区長を務め、2 年目には正区長となる。区長の主な仕事は、村役場からの連絡や区の行事を主催することである¹¹⁾。

大畑新田地区は 7 つに班編成され、それぞれに班長が選出され、各班長は村役場から区長に伝達さ

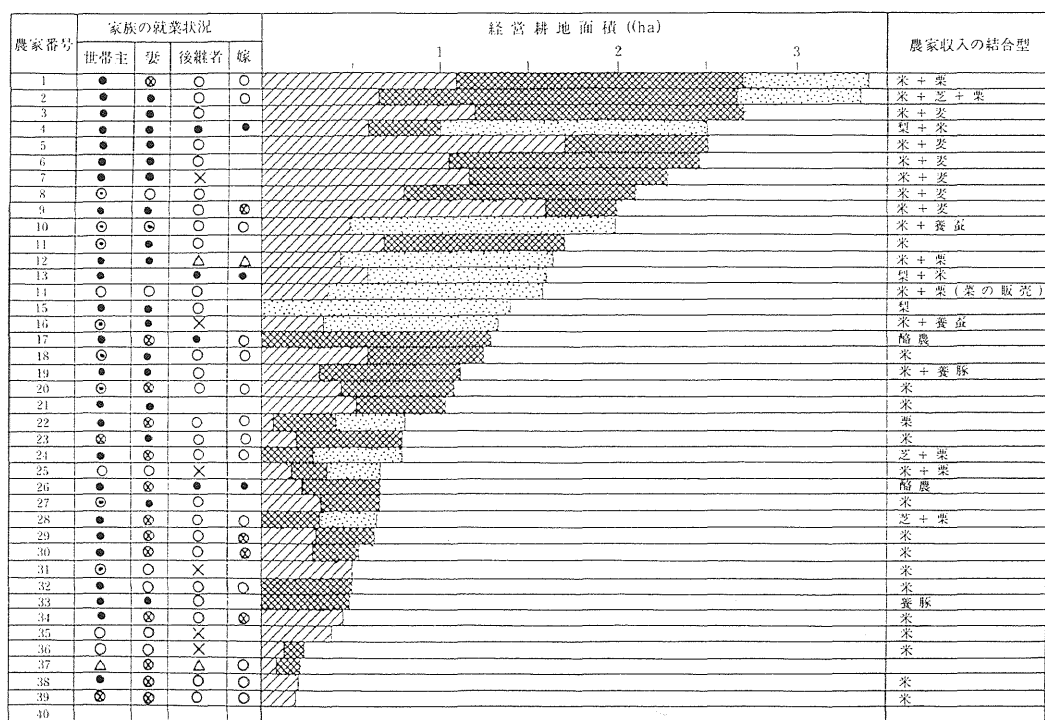


第 2 図 大畑新田地区における班構成 (1986年11月)

れた情報の連絡を各世帯に対して行う。1班から4班に属する世帯の居住年度は古く、分家を持つ世帯が多い。したがって、各世帯の地縁的・血縁的な結びつきが強く、そのため、五人組・十人講、庚申講等の組織を持ち、それらが冠婚葬祭には充分な機能を果たしてきた。しかし、近年は就業地が集落外に移り、伝統的な組織にも運営面での合理化が進みつつある。居住年度が新しい世帯が属する5・6・7班では、地縁的・血縁的な結びつきは弱く、家相互の交流の機会も少ない。各班の構成は1班が16世帯、2班が13世帯、3班が15世帯、4班が14世帯、5班が6世帯、6班が14世帯、7班が13世帯で、総世帯数は91である。また、各世帯の家族構成は、二世帯・三世帯家族がほとんどである。

1970年代中葉までの主な生業は農業であったが、1986年の調査時に農家数は39戸であった。その内訳は、専業農家が3戸、第1種兼業農家が18戸、第2種兼業農家が18戸である。また、非農家が44戸に達し、自営業を営む世帯が8戸ある。自営業の内訳は、商業が1戸と建設業が7戸になっている。

かつては、水田と普通畑での穀類・イモ類の生産や、養蚕が盛んであった。1960年代に入ると、これまでの伝統的畑作物に代って、野菜類・果樹(梨・栗)類の生産が盛んになった。現在では、兼業化が進み、後継者不足から省力化作物である芝ややなぎ、ゆきやなぎ、サンゴみずきなどの植木類が増加している。この状況は、第1図の土地利用図からもうかがえる。また、第1種兼業農家の多くは、採種用陸稲と小麦の栽培を行っている。大畑新田地区には採種用陸稲を栽培する農家が8戸ある。専業農家3戸のうち2戸は、梨の栽培を行い、残りの1戸は酪農家である。いずれも後継者を持



水田
 普通畑地
 樹園地
 ● 農業
 ○ 農業 + 臨時雇用労働
 ○ 恒常的雇用労働
 △ 自営業
 × 就学
 ⊗ 無職

第3図 新治村大畑新田地区における農家の経営内容(1986年11月)

っている。また、集約的な花卉栽培を行う農家もみられるが、後継者がなく、基幹労働者の高齢化が問題になっている。後継者の多くは20歳代・30歳代を中心とした会社員や公務員であり、将来にわたっても恒常的勤務者を望む者が多く、農業への就業意欲は乏しい。

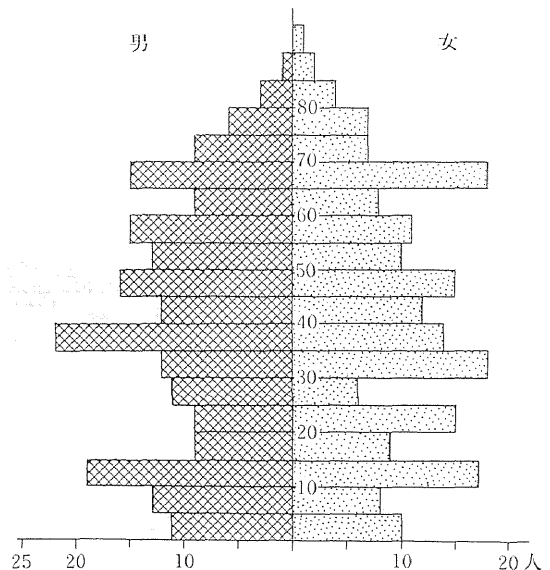
大畑本田と大畑新田両地区間の畑地に国道125号バイパスが建設中である。第1図の土地利用図の南端部分に接して、工事が進行中である。この完成により沿線の土地利用は、より都市的なものに転換されると予想される。さらに、県道土浦・小野線沿いの平地林と畑地には、工業団地の建設計画も具体化しており、伝統的農村景観の変化とともに、住民のコミュニケーション空間が大きく変容する時代を迎えると思われる。

Ⅲ コミュニケーション空間の形成者の類型

社会的なコミュニケーションを形成する要素には、まず、コミュニケーションの発信者と、発信されたメッセージと、メッセージの受信者という三つの基本的なものがある。とくに、本論ではパーソナルなコミュニケーションを取り扱うために、対象地域の全住民がコミュニケーションの発信者と受信者になりうる。また、農村部においては、コミュニケーションが家という枠組にとらわれながらなされることがある。そのため、家族の性格もコミュニケーションの内容に影響を与えている。したがって、本項では、コミュニケーションに関連をもつと思われる対象地域内の住民と家族の性格を検討しておきたい。

新治村大畑新田地区は、前述の通り、7つの班から構成され、合計91世帯、397人の住民からなる。第4図は、1986年現在の新治村大畑新田地区における人口ピラミッドを示している。男性人口総計205、女性人口総計192で、人口の男女比はほぼ同数であり、本地区は農村部に位置する割には男性人口が多い。人口ピラミッドは複雑な形状を呈するが、概観すれば「紡鐘状」と表現できよう。

その「紡鐘状」の形状を歪めることとして、10歳未満の年少人口が少ないことがあり、近年の自然増加率の停滞を示唆している。また、15～30歳までの人口数が少ないのも顕著なことがらであり、とくに男性人口にその様相が目立つ。この年齢層は、就学、就業のために村外へ流出したためと思われる。このような年齢層の就学・就業による一時的流出は、首都圏外縁部の他の地域でも見られる現象と考えられる¹²⁾。一方、第二次世界大戦後のベビーブームの影響も受けながら、男性人口では35～39歳、女性人口では30～34歳の生産年齢人口に人口数のピークが存在する。集落全体からすれば、年少



第4図 新治村大畑新田地区の性別・年齢別人口構成 (1986年)

人口が少なく、高齢人口が多い農村型の人口構成を示しているが、上記のような男女両人口の生産年齢層に人口数の一つの集中が存在する。そして、65歳以上の高齢人口は、男性人口では、全男性人口中16.6%、女性人口のそれは20.3%と高率に達し、男女の老齢人口をあわせると、全人口の18.4%になり、人口の高齢化を如実に示している。

人口の年齢構成の特性として、35～39歳を中心とした男性人口と30～34歳を主体とした女性人口の基幹労働力が、まず第一に存在する。彼らの大半は、長男・長女である。その父母達に相当する世代が60～70歳の年齢層である。しかも、基幹労働力を構成する年齢層の子供達の主体が、10～14歳層を形成している。したがって、後述するように、本地区の世帯が三世帯世帯中心である様相が、この人口ピラミッドからも看取できる。

同地区の就業構成については、第1表に示してある。本地区は農村の景観を表出しながらも、農業に専従するものは、男性33名、女性20名にすぎない。したがって、農業人口は、有業人口中、わずかに23.7%にすぎない。他方、卓越する職業は公務員・会社員などの恒常的給与所得者である。とくに、50歳以下の生産年齢人口のうち、農業に専従するものがきわめて少なくなっている。このような恒常的給与所得者の増加は、近隣地区に雇用機会が生じ、自家用車の普及によるモータリゼーションによって、在宅通勤化が進展したためである。

また、同地区には、大工・左官業を営む者が多いのも就業構成で、特色あることがらである。これらの自営業者と恒常的給与所得者は、週日には主に集落外で就業の場をもっている。したがって、日々のコミュニケーション行動に関しては、集落内と集落外の二つの場において、コミュニケーション空間が生じる状況が、就業構成の側面からも予想できる。

次に、同集落の家族の特色を考察したい。世帯は、家族の多様な現実態を実証的また統計的に研究

第1表 新治村大畑新田地区における就業構成（1986年12月）

	男	女
農 業	33名	20名
農 業 + 農 業 外 就 業	9	1
公 務 員	11	5
恒 常 的 事 務 職	62	60
自 営 業 者	17	4
うち 大工・左官業	11	0
商 業	1	1
そ の 他	5	3
無 職	20	64
小 計	152	154
学 童 ・ 学 生	34	24
就 学 前 の 乳 幼 児	19	14
小 計	53	38
合 計	205	192

（現地での聴き取りによる）

するために用意された分析概念とされている¹³⁾。家族と世帯とを同義語として用いることが多いが、世帯は同居と同一家計という指標によってとらえられる生活の単位である。

ここでは、本地区の世帯の一特性を知るために、第2表のように班ごとに各世帯に何世代が同居しているかによって類型化した。地区全体では、二世代と三世代世帯からなる直系家族が多い。しかし、世帯の類型は、班に応じてかなりの差異を示している。世帯の居住年度の古い1～4班においては、三世代世帯が多い。これらの班においては、当然、一戸あたり平均世帯員数も多く、とくに1班においては5.4人に達している。

一方、第二次世界大戦後に主として入居した6・7班の世帯では、二世代世帯に中心がある。そのため、一戸あたり世帯員数も、6班では3.0人、7班では4.1人と少なくなり、核家族化が進んでいる。このように、本地区には、一世帯に何世代も居住するものから、核家族化が進んだものまで、さまざまな世帯が混在している。

わが国の農村部には、集落の中で家単位に編成される組織として、同族的結合と講組的結合がある

第2表 新治村大畑新田地区における世代別世帯数（1986年）

	1 班	2	3	4	5	6	7	集落全体
一 世 代 世 帯	1戸	0	0	2	2	3	1	9
二 世 代 世 帯	3	2	5	5	3	10	7	35
三 世 代 世 帯	10	10	8	7	1	1	5	42
四 世 代 世 帯	2	1	2	0	0	0	0	5
合 計	16	13	15	14	6	14	13	91
一戸平均世帯員数	5.4	4.7	5.1	4.3	3.0	3.0	4.1	4.4

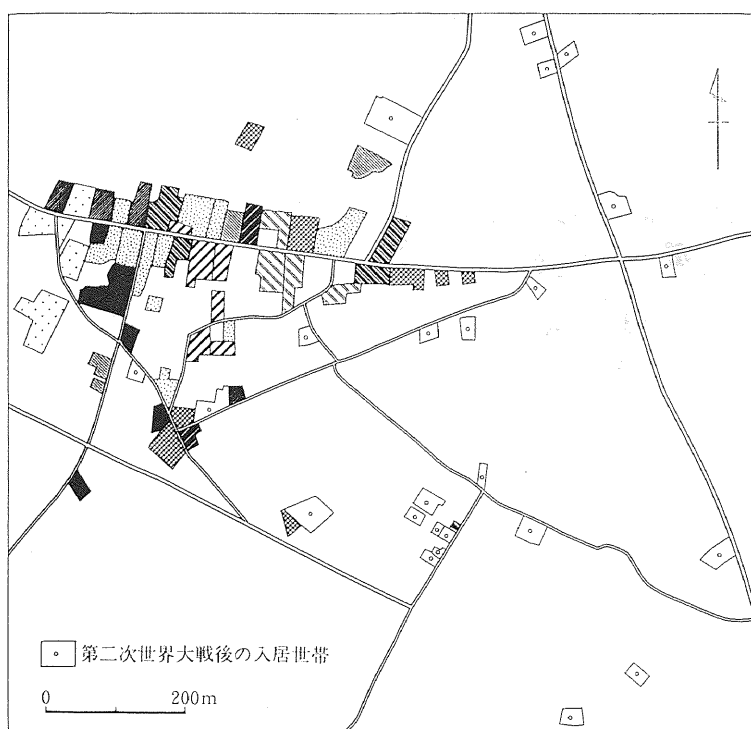
（村役場の資料より作製）

ことが指摘されてきた¹⁴⁾。本地区も就業構造や世帯の類型にみられるように、都市的諸要素の拡大が認められる。しかし、旧来の地縁的結合も依然として残在し、それらが住民のコミュニケーション行動に影響力を及ぼしている。

本地区には、同族的結合と講組的結合の両者が存在する。まず、血縁的集団は、同族的結合であって、原則として1戸ないし数戸が総本家を中心として分家や分家群をなし、生活共同体を形成しているものである。本地区では、本家をオモテ、分家をシンタクまたはインキョと呼称している。

本地区での血縁関係は、第5図に示してある。古くから居住する世帯が多い1～3班では、ほとんどの世帯が血縁関係を結んでいる。一方、4・5班になると血縁関係を結ばない世帯もある。そして、6・7班になると、血縁関係を結ぶ世帯は例外的になる。したがって、血縁的集団は、居住年度の古い家が属する集団である。本地区では、冠婚葬祭の際に、この血縁関係には、家と家とのつき合いが生じる。たとえば、七五三の祝いや家屋の建前の祝いには、家の戸主、または戸主夫妻が当該の家に祝いのために訪問する。さらには、農作業などの仕事が多忙な折には、相互に援助し合う「ゆい」がなされる。また、ときには選挙行動をとにもする場合もある。

一方、系譜的な従属関係をもつわけではないが、各戸が平等の立場で、相互扶助の機能を発揮する



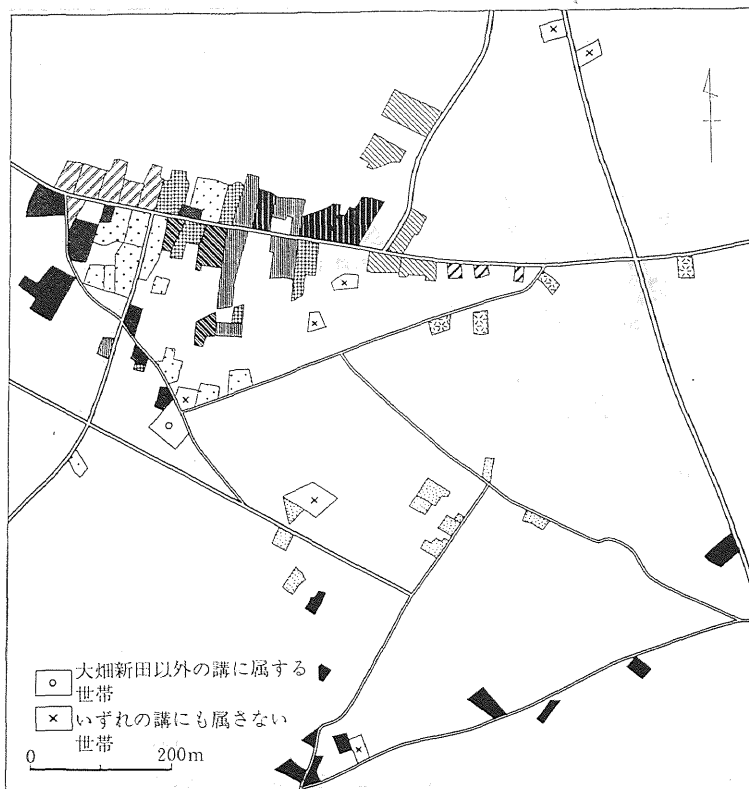
第5図 新治村大畑新田地区における血縁関係（1986年）
（同じ模様は同じ集団に属する。第6図も同じ）

地縁的な生活共同体として、五人組・十人講が存在する。本地区において、それらに属する世帯の分布は、第6図に示されている。ただし、大畑本田の講に属する世帯もあったり、いずれの講にも属さない世帯も存在する。前述の血縁関係と同様に、属する世帯が塊状に互いに接しながら存在するが、この講に属する世帯の方がより相互に近接している様相がわかる。

第二次世界大戦後に入居した世帯が多い6・7班においても、講が存在し、ほとんどの世帯が加入している。したがって、藩政時代の「五人組」のような状況から、しだいに、それぞれの家相互の結合が弛緩してきたが、上記のように新しい居住者に対しても講が組織されることから、その遺制ないし擬制がいまなお残存する。この講は、現在、冠婚葬祭の際に機能し、一般的には、戸主が当該の家を訪問する。さらに、各講には代表者が決められたり、当番制で春、秋の農閑時に加入する世帯の戸主が集って会食することがある。

その他、本地区内には、鷺神社の氏子集団、神宮寺（藤沢地区池の台）の壇家集団、そして庚申講・十九夜講・地藏講などの地縁的なコミュニケーション集団が存在する。

一方、上述のような従来から存続する地縁的・血縁的な生活組織とともに、行政が主導する機能的な生活組織が存在する。行政組織の代表的なものは、前述の班制度である。本地区には7つの班がある。この班は、村の行政組織の末端組織となっている。すなわち新治村は、旧村単位で3つの地区からなる。それぞれの地区には、いくつかの集落がある。大畑新田地区は、まず旧村単位の藤沢地区に属し、その地区のうち大畑集落に入る。ただし、大畑集落は、大畑本田地区と大畑新田地区の二つに



第6図 新治村大畑新田地区における五人組・十人講（1986年）

分けられている。このような公的コミュニケーション網は、行政の連絡として機能している。しかし、このような近代的な生活組織も、他地域と同様に、五人組や十人講などの家単位による地縁的な組織を基盤にしている¹⁵⁾。

生産組織の最も基本的な単位は農家であるが、その基本的な単位が直接結合した組織は農家組合である。この農家組合の組織は主に村役場の指導の下に形成されている。その他、にいほり村農協には各種生産部会があり、同一農作物を栽培する生産者の組織がある。

社会組織・余暇組織としても、青年会、婦人会、老人会、そして各種スポーツクラブが存在し、大畑新田地区の住民が個人単位で加入している。上記の各種生活組織は、農産物の商品化、社会教育、余暇活動の活発化によって、生産組織・社会教育組織そして余暇組織の地域住民に対する影響力が増大している。しかも、行政機構の地域に果たす役割はますます強化されるため、行政組織が地域を組織化する力を強めつつある。したがって、これらの近代的・機能的な生活組織によって、住民のコミュニケーション行動が活発化している。

IV コミュニケーション空間の諸類型

住民のコミュニケーション空間は、個々人に応じて異なる。しかし、本項では、前述のようにコミ

コミュニケーション行動が類似すると考えられる属性に応じて類型化した。以下には、それぞれの類型を代表する聴きとり調査結果を記述する。

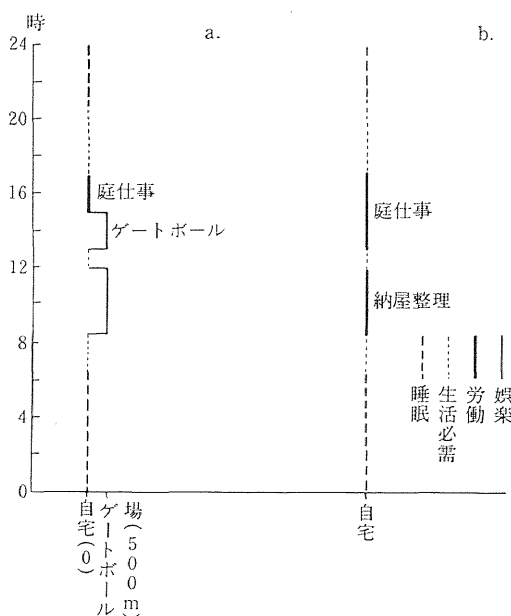
IV-1 老年層によるコミュニケーション空間

1) 男性

S氏の事例

S氏（1912年生まれ）の家族は、妻（1918年生まれ）に長男夫婦、孫2人の6人である。S氏は農業に従事しているが、すでに長男夫婦に代を譲っている。長男は新治村役場、嫁は下坂田のS工場に勤務しており、孫は高校3年生と中学2年生である。

ある週日のコミュニケーションを中心とした行動を以下に記述する（第7図）。起床は6時30分であり、洗面・朝食等の生活必需行動の後、8時30分には集落内（徒歩3分）にあるゲートボール場に出かけた。そこには、大畑集落の老人達が毎日10～15人ほど集っており、10時の休息（お茶の時間）をはさんで昼食時まで、ゲートボール（火・木・土）、クロッケー（月・水・金）に熱中する。10時



第7図 男性老年層S氏の週日(a)と休日(b)の生活行動
(現地調査による。第8～13図も同じ)

及び15時の休憩時間には、ゲートボール場の片隅にある小屋掛けの所で、持ち寄った茶菓子を食べながら試合の話や世間話が始まり、一種の情報交換の場所にもなる。さらに、昼食後も15時30分（冬季）、17時頃（夏季）までゲームを続行する。調査日には、S氏は、それ以降、庭仕事を暗くなるまで行った。庭の手入れは、主として老年層（男性）の仕事となっており、妻が手伝いながら年末までかかるという。農繁期には、この時間、畑仕事を行う。夜には夕食をはさんで入浴、テレビ等の時間が多く、20時頃には就寝する。夜の外出は極く少ない。

ゲートボール、クロッケーは親善試合大会も多く、主として村内や新治郡内の

他チームと交流するため、近くには自転車で、遠隔地には村の福祉バスで移動する。このように、新治村では老年層（男性）のゲートボール・クロッケーが非常に盛んで、これを中心としたコミュニケーション行動が中核となっている。ゲートボールは村の社会体育活動として、クロッケーは老人会の活動として、それぞれ組織的に行われており、7～8割の老年層（男性）が参加している。大畑新田地区でも68歳から80歳まで（平均年齢75歳）の老人達が活動している。とくに年齢制限の規約はないが、60歳代が少ないのは家族の若い者（息子夫婦）の多くが兼業や恒常的勤務者となっており、いわ

ば現役として農作業を担当しなければならないからである。また、大畑新田地区では、女性の参加が少ない。これは、女性の老年層が家庭内の雑務を担当しており、共稼ぎ・兼業世帯が多くなっている状況下で、家から離れられない条件をより多く持っているからである。

調査日直前の休日におけるSさんの行動は、次のようなものであった。起床はいつものように6時30分であり、朝食後8時30分から納屋の整理やむしろ干しを始めた。また、10時のお茶の後には、耕運機や農機具の手入れをし納屋の片付けを終えた。午後からは、夕方まで庭木の手入れをした。休日はゲートボールが休みになっており、農繁期には農作業が中心となるが、農閑期であるこの時期には大した仕事もなく、年末にむかっての庭仕事が多くなった。夕食後、就寝までの行動は週日と変わらなかった。したがって、この日は家から離れることもなく、また、家を訪れる人もなく終わった。役職を持たない老年層（男性）の休日は、買物にもほとんど出ず家中心の行動であり、庭仕事かのおんびりした休養の日となっている。

S氏は、ゲートボール・クロッケーの他に菊愛好会（大畑集落内で会員7人）にも参加している。4月下旬から10月にかけては、菊の刺芽、移植、施肥、枝振り調整、品評会出品等の行動が加わり、畑仕事とともに、他の老年層（男性）の中では忙しい毎日を過している。

親せきつきあいとしては、長男の妻の実家がある新治村田土部や東京・横浜の親せきに年に3～4回は訪問する。また、集落内の地縁的なつきあいには、代を息子に譲っていても家を代表して出席する。ただし、役場や集落の会合などの機能的なつきあいには長男が出席する。

以上のように、男性老年層のコミュニケーション行動は、ゲートボール・クロッケーが中心となっている。この活動は、集落内の家の格式を意識することなくつきあえるため、肉体的・精神的な健康の維持管理のみならず、集落内の平等なコミュニケーション空間の形成にも大きな役割を果たしているといえよう。この他には菊愛好会、老人会の活動、旅行などがあり、仲間や多様な人びととの交流活動が見られ、趣味を通じた広いコミュニケーション空間を形成している。また、親せきや集落内の地縁的なつきあいにも家を代表して参加している。したがって、主として家を中心とした女性老年層の狭まいコミュニケーション空間とは著しく異っていることが認められる。

2) 女性

Tさんの事例

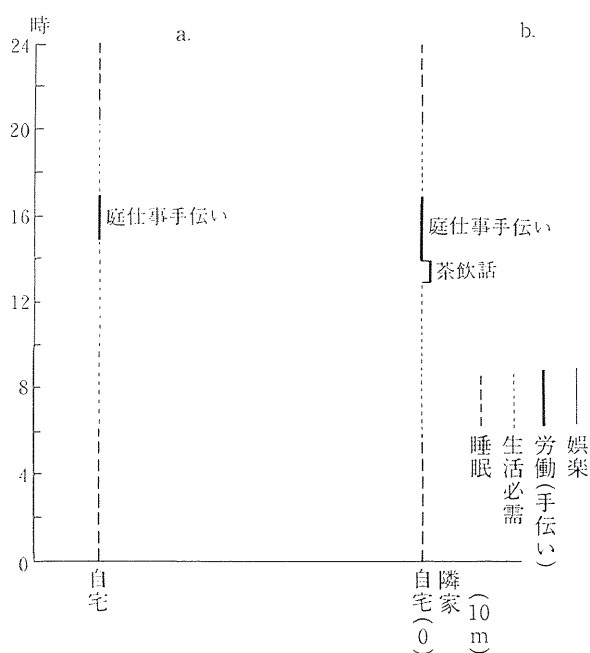
Tさん（1918年生まれ）の家族は、夫（1912年生まれ）、長男夫婦（長男が1942年とその妻が1944年生まれ）、孫2人（1968年と1971年生まれ）の6人である。夫は農業に従事（週日はゲートボール・クロッケーを行う）し、長男は新治村役場、その妻は村内工場への恒常的勤務者となっており、家族構成員6人中3人が就業している。また孫2人は高校生と中学生である。このため、Tさんの家族内での役割は、嫁と家事を分担しながら留守を預かることであり、家中心のコミュニケーション空間を形成している。この点、先に記述した老年層男性と比較し、コミュニケーションの種類、頻度、空間に大きな相異が認められる。

Tさんは6時に起床し、嫁とともに朝食の準備を始める。嫁は出勤前のこの時間に、そのほか洗濯、小物整理等の家事もできるだけするようにしている。8時前後には、孫達が登校、長男夫婦が出

勤し、夫はゲートボールに出かけた。その後は、朝食の後片付け、嫁と分担した家事（家の掃除、洗濯、家内の片付け、庭の掃除など）をしながら留守を預かり、家を離れることはほとんどなかった。12時30分には、ゲートボールから帰る夫と昼食をとった。

午後はまた、15時に夫が帰るまで午前中と同じような行動をした。この日は、家を訪れる人もなく、誰とも顔を合わせる事もなかったが、垣根越しに隣家の人の動きが見えるので別段孤独感を持たないという。15時に夫とお茶を飲んだ後、年末も近づいているので、夫の庭の手入れ仕事を手伝った。そして、18時前後には嫁が勤めから帰宅するので、その前から洗濯物の整理、風呂、夕食の準備など夕方の家事仕事に移り、夕食後、就寝は通常どおり20時30分頃であった。夜の外出はほとんどない。

Tさんの調査日前の休日の行動は、次のようであった。午前中は、週日の行動と変わらなかった。嫁が家に居ても、家事の分担が大体決まっていた、週日・休日とも同じような事をするということになる。午後は昼食が終わった13時頃、たまたま隣家の56歳になるおばあさんと顔を合わせたので、1時間位隣の家に遊びに行き茶飲み話をして来た。このようなコミュニケーションは、週1回位行われる。いずれの家を訪れるかという順番を決めているわけではないが、垣根越しに顔が合うとどちらかの



第8図 女性老年層Tさんの週日(a)と休日(b)の生活行動

の家に入り、お茶を飲みながら1時間位の世間話をする茶飲み友達の関係である。帰宅した後は、夫の庭仕事を17時頃まで手伝った。休日は夫のゲートボール・クロッカーが休みであるため、夫が家におり、農閑期である今の時期には庭の手入れを行っている、自ずと夫の仕事の手伝いをすることが多くなる。夕方及び夜の行動は、週日と同じであった。

このようにTさんは、週日・休日とも家を離れることがほとんどなく、家族以外とのコミュニケーション行動は隣家の茶飲み友達に限られており、その空間はきわめて狭い。

この点、嫁が終日家にとどまる家族の女性老年層の場合とコミュニケーション空間が異なっている。すなわち、Tさんは留守を預かるという事が、家族内での仕事の一つとして位置付けられている。二世・三世家族においては、核家族と異なって老人層が家庭内の仕事を分担する。そのため、若夫婦の家庭外の就業を促進することにもなっている。それに対して、嫁が家に居る女性老年層は、週日、孫を連れて、1人で村内を散歩しながら、子守りの老人や専業主婦とのコミュニケーション行動（挨拶・立ち話程度）が行われるため、その空間もかなり広いものとなる。

Tさんが外出するのは、村内下坂田の新治診療所や土浦市真鍋町の病院（整形外科）に、月に2～3回など自動車で、長男または嫁に連れて行ってもらうことである。または、盆や暮に、かつて、世話になった村内の家や、友人の家に挨拶に出かける程度である。

以上のように、Tさんは、外部とのコミュニケーションは著しく少なく、また、その空間も隣家という範囲で極く狭い。したがって男性老年層のコミュニケーション行動とは異なったものになっている。女性老年層の場合は、地縁的、そして、機能的なつきあいも限定されており、家族内の仕事の分担の程度によってコミュニケーション空間の広狭が決定されるといえよう。

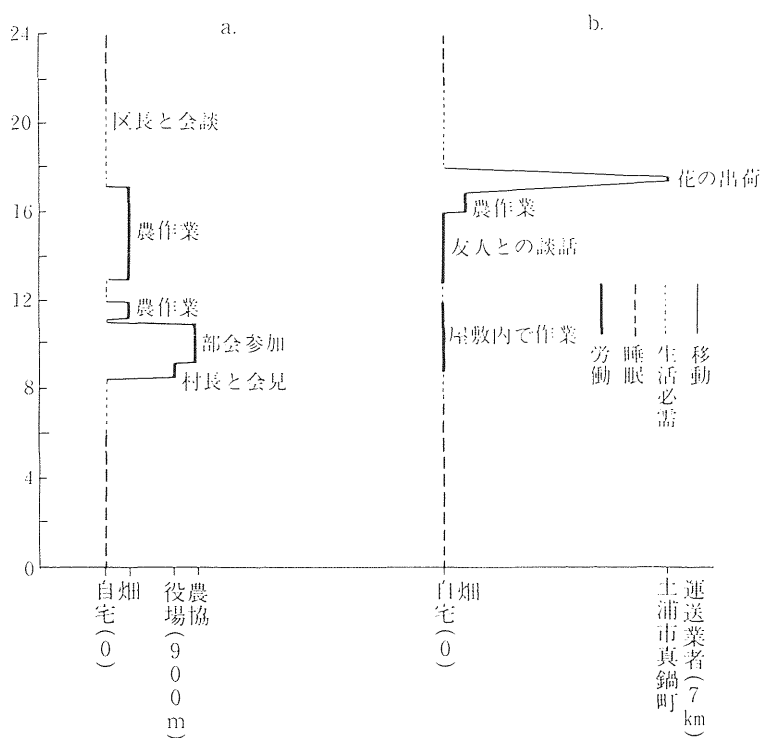
IV-2 生産年齢層によるコミュニケーション空間

1) 農業就業者

K氏の場合

K氏（1927年生まれ）の家族は、妻（1929年生まれ）、長女（1955年生まれ）、養子（1951年生まれ）、孫（1984年生まれ）そして妻の母親（1904年生まれ）の6人である。本人と妻が農業に従事し、養子は石岡市の会社に勤務し、家族構成員6人中3人が就業している。

K氏は、毎日ほぼ午前6時に起床する。1986年10月下旬の調査日前日には、8時30分に自宅を出て、徒歩で約900m離れた役場に向かった。彼は、大畑集落の正区長をつとめているため、10月18日（土）に水戸市で開かれた茨城県の民俗芸能に出演した「大畑のからかさ万灯」の村長への報告であった。「大畑のからかさ万灯」は近世中期以降おこなわれている鶯神社の降雨を神に祈る雨乞いの祭礼である¹⁶⁾。当地区内では、毎年8月17日に



第9図 農業就業者K氏の週日(a)と休日(b)の生活行動

祭には、近郷近在から家族連れなど5,000人から6,000人が詰めかけ、境内はその参詣の人びとでにぎわう¹⁷⁾。区長という職務を担うため、当日も村役場で村長や「大畑のからかさ万灯」保存会会長などの人びとに会っており、コミュニケーション行動の範囲が広い。午前9時10分に役場を出て、村役場に隣接した農業協同組合へ向かう。9時30分から11時までの「陸稲種子採種部会」に出席した。農協には、

「陸稲種子採種部会」が組織されており、村内で18名が加入しており、そのうち8人が大畑新田に居住する。会員の耕作面積を合計すると、13haに達し、新治村の特徴ある農産品の一つになっている。

農協から自宅に徒歩でもどり、11時10分から自宅付近のハウスで、花卉栽培に従事した。彼は、150㎡のハウスを3棟所有し、そのうち2棟でフリージアを、1棟でカスミ草を栽培している。その他、耕地として露地の花卉畑を20a、水田を70a、畑地100aを所有している。畑地の作付として、60aが陸稲であり、残りの40aに稲作から転作した大豆の作付がなされている。

12時までハウスで花卉栽培に従事し、自宅で昼食をとった。昼食時には、妻、長女、孫そして養母とともに5人が団らんし、家族としてのカップリングが生じた。K氏は、農業に従事し、所有の耕地が自宅から近距離に位置するため、昼食をほとんど自宅ですませて、約1時間の休憩がなされる。

午後1時に再び花卉の畑にもどり、露地のものである夏菊の後片付けに従事した。前述のように、農業には主として妻とともに従事するが、この日は本人のみ従事を行い、その間、コミュニケーションする人物はいなかった。午後5時10分ごろ帰宅した。夜間8時から8時20分ごろまで、大畑の副区長の訪問があり、健康保健の納入金に関する話し合いが行われた。区長の任務があるために、夜間でも訪問者が時にはあり、集落内の人びととのコミュニケーション空間が自宅内に生じる。

農作業の休日は、降雨日や強風日など。自然条件の悪い日である。11月下旬の休日の行動は、以下の通りであった。7時30分に起床し、9時まで洗顔、朝食などの生活必需の時間ののち、午前中は屋敷内にとどまって、農機具の修理、物置の整理を行った。12時から13時まで普段と同様に昼食をとった。そののち、テレビを見ていたが、12時から16時まで本地区内の同世代の友人が訪れてきて、会談した。友人も農業就業者であるが、当日、悪天候のため農作業を休んでいた。友人が帰ったのち、畑地のフリージアを収穫し、個人出荷のため土浦市真鍋町の運送業者まで運んだ。18時に帰宅したのちは、就寝の22時まで外出したり、家族以外の人と会うこともなかった。上記のような休日の行動が聴とりよりわかったが、休日といえども、屋敷内での仕事があり、花卉の収穫と出荷行動もあった。

本人が買物行動を行うことは、きわめて少ない。1年に1～2回の頻度で土浦市の中心商店街や大穂町の大曾根商店街で野良着、地下足袋を購入するにとどまる。農協の陸稲種子採種部会にも属しているため、夏季に陸稲種子採種の先進地域への視察がある。1986年度は、結城市・八千代町へ日帰りの研修旅行があった。さらに、講習会が年に2回あり、それらは種まき前の8月初旬と穂が出てからの8月中旬である。これらの農協の部会を通して、大畑新田外の人びととのつきあいが生じている。

区長としての任務の一つに、集落内の人びとの親睦の促進がある。その主要な行事には、3月下旬に開催される球技大会、7月最終の日曜日の子供のための祇園祭、8月17日の「からかさ万灯」、11月3日の村民体育大会がある。それらの開催のために、準備に係わるコミュニケーションが多い。たとえば、11月3日の村民体育大会は、会場を新治中学校とし、村内で合計20の集落を単位としたチームが出場する。その集落単位の一つとして、大畑新田と大畑本田が合体して出場する。村の体育協会の役員が各集落に2～3名選出されており、彼らが出場選手を決めるが、区長としての責任があるため、準備に多くの時間が割かれる。

親せきのつきあいとしては、K氏は婿入りのため、暮には実家がある隣接の桜村栗原へ行く。ま

た、兄が筑波町国松に住むため、年に3～4回は訪問する。そして、桜村中根には妹が嫁いでいるために、トマト・きゅうりなどのハウス栽培の農作業を手伝いに行く。また、妹夫婦がK氏の田植え前の耕起、稲かりなどを手伝う。K氏の世代においては、通婚圏は一般に狭い範囲に限定されていた。したがって、ライフサイクルとしてのコミュニケーション空間とも考察できる通婚圏は、かつては狭いものであった。それゆえ、親せきが近隣に居住することも多く、農作業の相互の手伝いや、余暇としての訪問も多くなっている。

2) 農外就業者

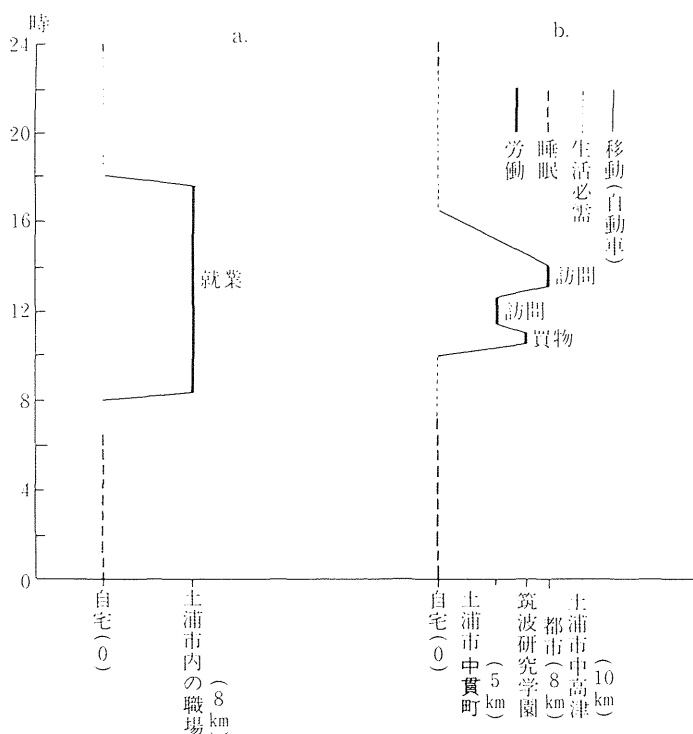
H氏の事例

H氏（1947年生まれ）は当地で誕生し、農家の長男である。当家は、江戸時代初期の新田開発以来、現住所に居住している。

1970年代中頃までは父母と、男女2名の雇用労働者を使用し、米作を中心に栗・葉タバコの生産が行なわれていた。しかし、父の村役場勤務を契機に、また、雇用労働力不足から経営規模を縮小し、専業農家から第2種兼業農家へと移行した。現在、父は退職し、自給用の米や野菜類を生産している。

H氏の家族は、父・母・本人・妻・長男の5人であり、妻は専業主婦で、母は子守りと家庭内の雑務に従事している。長男は4歳である。

H氏宅が属する大畑新田の1班は、集落の西端に位置し、それらの家屋は県道土浦・小野線に東西方向に交わる村道に沿って集中している。また、前述の通り、1班に属する世帯は2班・3班のそれとともに居住年度が古く、地縁的・血縁的にも相互に深い関係を有しており、16世帯中14世帯が農家



第10図 農外就業者H氏の週日(a)と休日(b)の生活行動

である。現在、専業農家が1世帯のみであり、その農家は観光梨園を経営している。他の13世帯は2種兼業農家であり、しかも後継者は全員農外就業者である。

H氏は、現在、土浦市内にある県立高等学校に教員として勤務している。H氏の週日のコミュニケーションを中心とした行動は、以下に記述する通りである。毎日ほぼ6時30分に起床し、洗面・朝食をすませて8時に自宅を出る。勤務先へは自家用車を利用して、おおよそ8キロメートルの道のりを20分で到着する。その時点から16時50分頃までは勤務先である高等学校に滞留し、授業のほか、職場の同僚とのコミュニケーションが行われる。職場での教職員の大半は土浦・石岡市を中心に、隣接する阿見・筑波町、千代田・出島村、そして牛久市・岩間町・新治村などの在住者である。しかし、水戸市・友部町、真壁町などからの通勤者もいる。

勤務地を17時に出て、18時に帰宅したが、その途中に土浦市の中心市街地で買物をした。調査日のように、帰宅途中に土浦市での買物や、喫茶店での友人との談話を行うこともあるが、遅くとも18時までは帰宅する。就寝は23時40分で、夜間の外出はほとんど無い。つまりH氏の場合の週日にみられるコミュニケーション行動は、職場での同僚との間に成立し、村内や集落内でのそれはほとんどない。

1986年12月上旬のある休日には、次のような行動があった。週日より遅れて、7時10分に起床した。洗面・朝食・後片付けを済ませ、午前10時に自宅から約8キロメートルの距離にある筑波研究学園都市内のSデパートに自家用車で行き、買物をした。午前11時にSデパートを出て、11時20分に土浦市中貫町にある妻の実家に立ち寄り、さらに弟の住む土浦市真鍋6丁目に立ち寄った。途中昼食を済ませて、13時頃、母の実家のある土浦市中高津1丁目に到着した。1時間程雑談し、16時30分に帰宅した。こうした親類への訪問は、正月・盆・暮の時期には恒例になっている。つまり、年に最低3回は近親者とのコミュニケーションがある。なお、妻の実家との交流は、近距離¹⁸⁾でもあるため年に6〜7回程度持っている。

伝統的地域社会の色彩を強く有した1班においても、近年の兼業化によって、就業の場が集落外に生じる。そのため、週日のコミュニケーション空間が分散するようになった。だが、依然として集落内には地縁的組織は存在するが、構成員間での交流の頻度は低くなっている。

しかし、H氏が自警消防団に所属していた1980年までは、消防機具の点検整備、夜警や緊急出動、そして訓練の際などに、大畑地区の同世代団員との交流頻度は高かった。現在では年1回行われる村役場主催の地区対抗のソフトボール大会や、壮年ソフトボール大会を通じて、集落内の同世代の者達との交流がわずかに存在するのみである。

なお、大畑地区には国選択・県指定の無形民俗文化財の「大畑のからかさ万灯」があり、毎年8月17日に催される。区長・副区長・保存会長・評議員・神社総代・実行委員など地区の役員をはじめ、各年代の人々が祭りの前約1週間には毎晩、準備のために鷲神社境内の田園都市センターに集まる。この時ばかりは、地縁的共同体意識が高まり、交流は祭りの翌日の後かたづけが終了するまで続く。しかし、6班・7班からの参加者は少ない。

また、大畑新田地区内での住民の冠婚葬祭、世帯の新築祝い、講などへの参加は父親が行って

り、H氏の参加はほとんどない。このように、父母が健在な世帯の場合は、地域社会での付き合いは、老人が中心的役割をはたしている。しかし、H氏は職場で催される年5～6回のゴルフ大会には参加して、同世代の職場仲間と交流を深める。つまり、父母が健在の若い世代のコミュニケーション空間は、村や地区内よりも就業の場に比重が大きい。

3) 自営業者

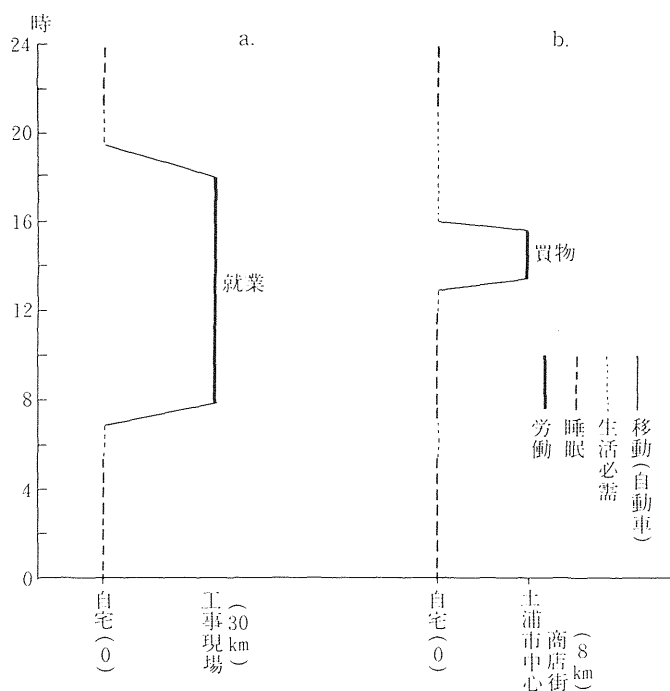
W氏の事例

W氏（1942年生まれ）は、1974年12月に、現住所に家屋を新築して入居した。それまでは、土浦市小松のアパートに居住していたが、1973年に現住所の土地を購入していた。現在、工務店を経営し、妻は村内の田土部にあるコンピュータ部品製造のN製作所にパートとして勤務している。長男（高校3年生）と次男（高校2年生）の2人の子供がいる。

W氏は、現在、大畑新田7班の班長を務めている。前述のように、大畑新田は7つの班に分かれて、7班には13世帯が属している。この13世帯の戸主のうち、無職の2世帯を除いて、他は、恒常的勤務や自営業（レストラン経営、トラック運転手など）を営んでいる。しかも、7班の全世帯は第二次世界大戦後の入居であり、W氏の世帯のように、10数年前からの居住年度の比較的短かい世帯が過半を占める。

1班から5班に属する世帯は、県道小野・土浦線に東西方向に交わる道路に沿いながら集中しているが、入居時期の新しい世帯が多い6班と7班に属する世帯は、それらより南側に位置している。また、家屋も分散している。

W氏の週日のコミュニケーションを中心とした行動を以下に記述する（第11図）。起床は午前5時30分であり、洗面・朝食をすませて、7時に自宅を出る。調査時点（1986年12月）には、竜ヶ崎市佐



第11図 自営業者W氏の週日(a)と休日(b)の生活行動

貫町の国鉄佐貫駅付近で、家屋の建築を請負っているため、建築現場に向う。自宅から約30キロの道のりを、自家用トラックを使用して、7時50分頃に現場に到着する。その時点から午後6時までは、現場にて作業を行い、昼食をすませる。その間に、家屋の建築関係者と作業をともにすることがある。同じ現場で作業する者には、屋根工事（新治村大畑に居住）、基礎工事（阿見町）、畳職人（土浦市）、左官（出島村）、経師職人（阿見町）、建具職人（土浦市）、板金加工職人（美浦村）、そして内

装を担当する者（新治村田土部）らがいる。18時に現場を離れて自宅に向うが、道路の交通混雑のため、自宅に自家用トラックで到着するものが19時30分頃になる。毎日、21時頃には就寝する。ときには、上記の共同で作業する者と、仕事の後に、飲食をともにすることがある。

一つの家屋を請負った場合、一般的に完成するまでに3カ月間ほどの日数がかかる。そのうち、2カ月余が現場での作業となる。そして20日間ほどの日数は自宅の作業場で建築材の切断等の作業がなされる。週日でのコミュニケーションは、主として建築現場で作業をともにする者となされる。このコミュニケーション・グループに属する者のほとんどが工務店を経営しているため、他の者が建築を請負って多忙で人手が必要ときには、相互に手伝うことがある。棟上式には、上記の者達が一堂に会し、そして1年に1度、年末に忘年会が催される。したがって、K氏の場合、仕事を通じての村外での付き合いの関係が強い。

家屋の建築の仕事の場合には、降雨日が休日となり、疲労がついた場合にも、休日にすることがある。1986年12月上旬の雨天の日には、次のような休日としての行動があった。

普段と同じように、5時30分に起床し、洗面・朝食を済めたが、雨天とわかって7時から再び正午まで就寝した。昼食の後に、妻の勤務も休みであったため、2人で土浦市の中心商店街に食料品・衣服等を購入のために自動車で外出した。16時には帰宅し、そののちは自宅にとどまった。

W氏の場合、仕事の関係以外の者との友人・知人関係者は少ないが、正月と暮には、本人の実家がある筑波町の小田と妻の事家がある桜川村の古渡へ出かける。

前述のように、W氏は7班の班長をつとめるため、班長としての任務がある。その主要なものは、村役場からの伝達事項の連結であり、平均して週に1回ほど回覧板を班に属する世帯にまわす。

大畑本田地区と大畑新田地区から、前述のようにそれぞれ区長が選出されるが、その他大畑集落全体から区長・副区長そして評議員12名・神社総代6名がそれぞれ選出される。構成員の会合は毎年1月15日になされる。その際に、大畑新田地区の者のみならず、大畑本田地区の者にも会う機会がある。役員になると毎年1月15日に「初参会」と呼ばれる役員会に出席せねばならず、自ずと公的コミュニケーション行動が生じる。

冠婚葬祭には、十人講が組織されているが、W氏が属しているものは、7班の13世帯から1世帯（大畑本田の講に属している）を除いた12世帯のものである。上記のように、地縁的な組織が存在し、それによるコミュニケーションも存在するが、コミュニケーションする頻度は低い。しかも、7班に属する者と、入居時期が古い世帯が多い1～5班までに属する世帯の者との結びつきも弱い。ただし、子供が小・中学校に在学中には、PTAを通じて、他の父兄との付き合いは存在した。

IV-3 専業主婦層によるコミュニケーション空間

1) 入婚した専業主婦

Yさんの事例

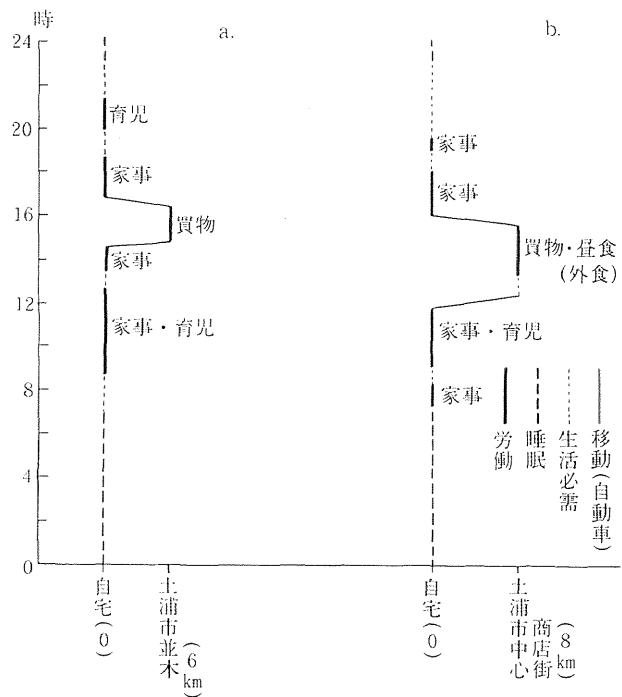
Yさん（1955年生まれ）は、1981年11月に土浦市中貫町からY家に嫁いできた。Y家の調査時の家族構成は、父・母・夫・本人に長男の計5人である。

Yさんは、結婚するまでは土浦市内にある金融機関に勤務していた。結婚のために退職してからの数年間には、かつての職場の同僚や、高校・大学時代の友人との交流が中心で、地域的なコミュニケーション行動の頻度は低かった。しかし、長男が戸外で遊ぶようになり、大畑新田地区の西端に位置する児童公園で長男を遊ばせる頻度が増すと子守りの老人や、専業主婦とのコミュニケーションが成立するようになった。児童公園には、条件の良い日中には20名前後の人びとが集まる。集まる人びとの居住範囲は、大畑新田地区全域に及ぶが、来園頻度の高い者の多くは、大畑新田地区の1班・2班・3班に所属する世帯員である。

Yさんは、長男が就学前のため、地域社会で交流頻度の高いPTA活動や、村役場の組織である「若妻会」には参加していないので、地域社会内での交流機会は少なくその範囲も狭い。しかし、子供の成長とともにコミュニケーション空間は拡大される。例えば、子供が小学校に入学すると旧村単位でのPTA活動、また、中学校に入学すると全村単位のPTA活動を介しての交流が成立する。さらに子供が小学校入学と同時に親子で「大畑新田子供会」の組織に加入する。子供会には親子が年間計画を作成して、公園・集会所の清掃作業や、廃品回収などの多彩な地域活動や行事に参加するようになる。そして、夏休みには祇園祭・

遠足・朝のラジオ体操・キャンプファイヤーなども催されて、父母や子供達は相互の交流を活発にさせる。他地域からの入婚者の地域社会でのコミュニケーション行動は、子供の小学校入学を契機に大きな変化を示し、コミュニケーション空間は拡大される。子供が就学していないYさんには上記のような機会も少なく、日常行動は単調で、しかも、コミュニケーション空間は狭いものにとどまっている。

1986年11月下旬の調査日前日のYさんは通常のように朝6時40分起床した。朝食の準備・朝食・後片付けを済ませたのが8時30分頃であった。洗濯・室内の清掃等の家事を終えたのが10時30分過ぎであった。その後は、4歳



第12図 専業主婦Yさんの週日(a)と休日(b)の生活行動

の長男とともに近隣の同年代の子供を持つ世帯を訪問した。普段もこのように訪問したり、友人を自宅に呼び、子守りの老人や専業主婦とのコミュニケーション空間が自宅内や近隣世帯で生じる。昼食の準備のために11時30分には帰宅した。昼食は13時からとった。昼食の後片付けを終え、14時30分には自家用車を運転して、土浦市並木町のKスーパーマーケットで買物をした。なお、買物行動は筑波

研究学園都市のデパート・スーパーマーケットでなされることもある。16時30分に帰宅して、その後は夕食の準備と、洗濯物の整理をして自宅内に留まった。17時30分頃、村役場からの回覧板が隣家から回覧されたので、それを持参して他の隣家へ行った。ここで隣人との交流がわずかに成立した。夕食は19時にとり、その後30分程家族との団らんがあった。後片付けを終えて入浴を済ませた時は21時を少し過ぎていた。自分で自由に使える文化的生活時間は21時30分以降となった。なお、夜間の外出はほとんど無い。

休日の行動についても週日と同様の行動がみられ、生活のリズムもほぼ同様であった。なお、調査日に近い休日には普通の休日と異なった行動がみられた。

通常よりやや遅い7時に起床した。その後は普段と変らぬ時間と行動があった。しかし、家事労働を終えた10時30分から11時30分まで、週日と異なった行動があった。週日なら外出の機会の多い時間帯に自宅内に留まり、子供と夫とYさんの3人で遊んだ。そして、11時50分頃夫の運転する自家用車で家族全員とともに土浦市内のレストランに出かけた。13時には昼食を済ませて、土浦市内のデパートで買物をして、16時には帰宅した。普通の休日にはこの時間は、昼食を済ませ、14時頃から16時頃まで週日より狭い範囲の近隣2～3世帯を中心に行動する。休日のこの時間帯が同世代の子供を持つ父母との唯一のコミュニケーションの機会となる。なぜなら、近隣の子供の父母の多くが恒常的勤務者のためである。

こうした状況からみると、就学以前の子供を持つ入婚の専業主婦にとっては、週日・週末ともに地縁的なコミュニケーション空間はきわめて狭い範囲に限定されている。ただし、年周期をみると、近隣地区の実家や親せきとの交流があり、また、友人宅への訪問もある。これら友人関係は、結婚以前からのものであり、結婚後も自宅と友人宅とが近距離であるため、友人関係は持続しているものである。

2) 実家にいる専業主婦

Fさんの事例

Fさん（1955年生まれ）の家族は、夫（1951年生まれ）と長男（1984年生まれ）、そして両親（父は1927年、母は1929年生まれ）、祖母の6人からなる。夫は石岡市の会社に勤務、両親は農業に従事しており、また父親は現在大畑新田地区の区長を務めている。祖母は82歳の高齢である。

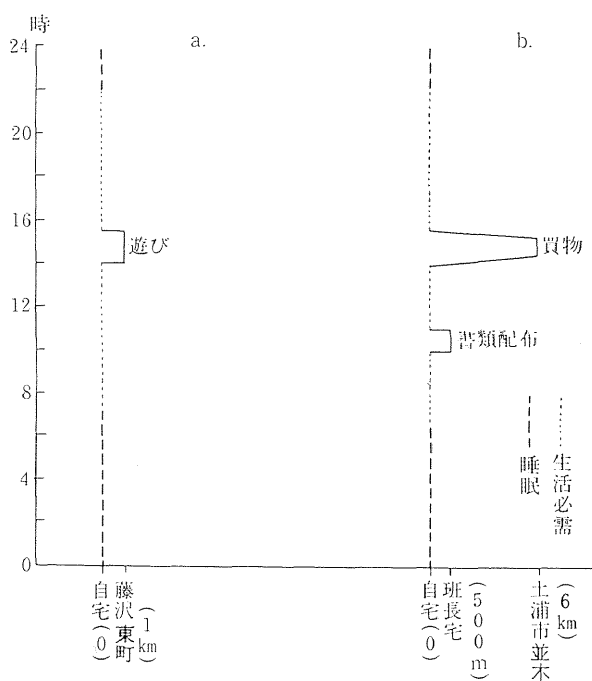
6時30分に起床し、母親と朝食の準備をし、朝食後8時には夫が出勤する。また続いて、両親も農作業に出かける。Fさんの家では、150㎡のハウス3棟、水田70a、畑120aを所有し、花卉、水・陸稲、大豆栽培を行っており、調査時の10月下旬には陸稲収穫、花卉栽培に忙しい。午前中は家にいて、朝食の後片付け、掃除、洗濯等の家事を行う。しかし、まだ長男が3歳と手がかかり、その上、出産が近づいているので、家にとどまっていることが多い。家にいても、ただ家事をするだけでなく、他人とのコミュニケーションが多い。父親が大畑新田の区長を務めているために、役場からの電話連絡や書類送付、各班長への諸連絡があり、また、近所の人達がいろいろな事を尋ねに立ち寄る。両親とも農作業に従事する時には、それらを取り次ぐ必要があるため、家から離れることができない。家を拠点としながらも、多様なコミュニケーションが形成される。

12時には、両親が農作業から戻り、祖母、子供との昼食になる。この時、必要な連絡を父親に伝え、午後には指示された仕事を父親に代行して行うこともある。その仕事とは主として電話連絡である。昼食後もしばらく家にいて家事を行ったが、14時頃から子供を連れて徒歩で10分程度の距離にある村内の親せきの家に遊びに行った。15時30分頃、帰宅した。このような行動は月2回位のものであり、普段は、1時間位家のまわりを子供とともに散歩するのが日課となっている。本地区の西端にある「大畑田園都市公園」(児童公園)に一時立ち寄るが、その他は子供まかせのコースをとる。子守りの老人や知人と会えば立話しとなるが、そのような機会はあまり多くない。

夕方、帰宅してからは、子供の世話をはじめ、家事中心の行動となるが、調査の日は、夕食の買物に出かけなかった。夕食の材料は、村内東町の商店や行商から購入したものですすことができます、商店での買物も2～3日に1回ですむという。夕食後は、外出することがなく、就寝は22時頃であった。

調査日前の休日は晴れであった。両親は農作業に従事し、夫は会社の同僚とともにゴルフ大会に出かけた。休日、夫はよく野球、ゴルフに出かけ、たまに家にいても、Fさんの行動は週日とあまり変わらない。この日、午前中家にいたが10時から11時までは父親に代わり役場からの書類を各班長宅に配布した。また午後の14時から15時30分まで土浦市並木にあるスーパーマーケットに自動車で行くために家を離れた。このような自動車での買物は、新聞のチラシ広告を見て週1回位行っている。

週日・休日とも家を離れるのは、散歩、子供の病院、買物程度であり、行動の範囲は家中心となっている。しかし、父親が区長を務めているため、コミュニケーションの種類は一般の専業主婦と異なり多様である。また、Fさんは実家にいるため、叔母(桜村中根)や伯父(桜村栗原)の家へ月2～3回訪問したり、夫の実家(桜村栗原)へ出かけたりする。



第13図 専業主婦Fさんの週日(a)と休日(b)の生活行動

このように養子と結婚したFさんの場合、嫁いできた専業主婦と異なり、機能的なコミュニケーション行動が限られているのに対して、地縁的・血縁的なコミュニケーションの種類が多く、しかも、頻度も高く、かつ広いコミュニケーション空間を形成しているといえる。

V む す び

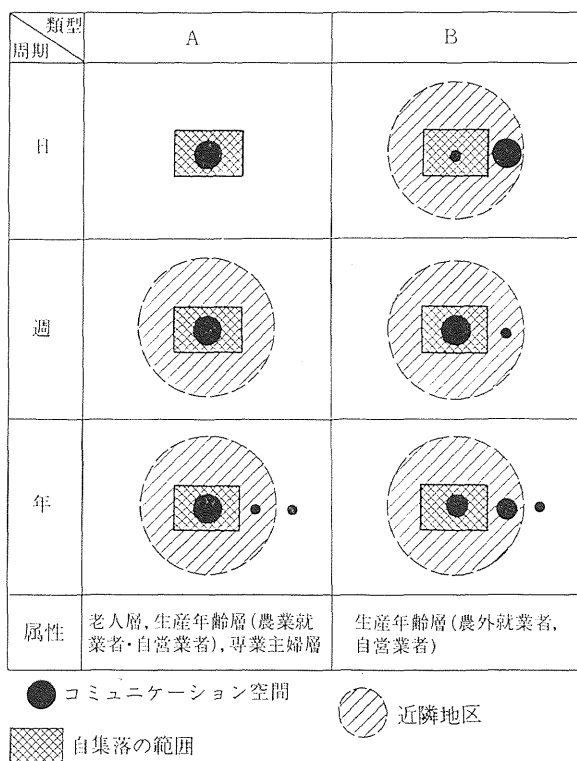
近年の経済の成長，都市化の進展とともに，農村地域においては農業従事者の高齢化・兼業化や農外流出の進展がなされている．同時に，非農業の農村集落への居住に伴う多様な住民の混住化の進行，都市的施設の進出，生活行動の広域化や価値観の多様化等がみられ，これらは総じて農業生産環境を悪化させる要因として，地域にさまざまな影響を及ぼしてきた．

上記のように，農村地域が多様な要因によって変容を強いられている一方，旧来からの様態を依然として維持している．本研究は，茨城県新治郡新治村大畑新田地区を事例として，成人の住民が直接他人と接して成立するコミュニケーション行動によって，生活空間をいかに組織化しているかを究明することを試みた．この研究課題によって，変貌しつつある農村地域を個人，家，社会的集団の側面から文化的・社会的な視角から把握しようとしたものである．

コミュニケーション行動は，生活行動の中でも個々人に応じて，多岐にわたるものである．しかし，それらを類型化すると，第14図に示すように，AとBの2類型に大別することが可能であろう．すなわち，A類型は，老人層，農業就業者，自営業者（主として，週日集落内にとどまるもの，たとえば商店・飲食店経営者）などの生産年齢層そして専業主婦層に属するものによって形成され，主として週日に自集落内に滞留する住民によるものである．他方，B類型の属性には，研究対象地域内

では，公務員・会社員などの農外就業者と大工やトラック運転手などの自営業者が含まれる．本論の研究対象地域のように，首都圏外縁部に位置するために，雇用機会が近隣地区に生じ，しかもモータリゼーションによって在宅通勤化が進むと，かつては純農村の性格を有していた本地区にもB類型に属する住民層が増大しつつある．本地区には二世帯・三世帯家族が多いために，家庭内で家族員相互の役割分担が生じ，そのために農外就業者を折出させる環境が生じている．基幹労働力の就業構成の変化は，また，土地利用に如実に投影されている．たとえば，芝や陸稲などの省力化作物の面積が拡大しつつある．

A・B類型のコミュニケーション空間の本質的な差異は，A類型のそれが自集落に主として完結する地縁的なものであ



第14図 農村部におけるコミュニケーション空間の類型

り、それに対してB類型のそれは、自集落にとどまることなく、むしろ自集落外に広く展開するものである。しかし、A・B両類型のコミュニケーション空間とも、コミュニケーション行動者の属性や時間的リズム（生活周期）などの諸要素が絡み合い、きわめて複雑である。

以下にA・B両類型のコミュニケーション空間のそれぞれの特性について記述する。

A 型コミュニケーション空間の特性

1) A型コミュニケーション空間とB型のそれとが大きく異なるのは、日周期のものである。A型コミュニケーション空間は、週日には主として集落内にのみ形成される。

2) 老人層のうち、男女の性別でコミュニケーション空間が異なる。男性老人層には、ゲートボール・クロッケーなどの余暇組織が浸透し、家の格式にとらわれず、平等なコミュニケーション空間が形成されつつある。それは、主として集落内にとどまるが、女性の老人層のそれに比較して、一般に広い。女性老人層の日々の近隣におけるつきあいは、主として同性の気の合う者同志との行き来が主体となる。

3) 専業主婦層では、集落内で誕生し留まっている者と集落外から婚姻のため入居した者との間に多少の差異があった。前者は、当然のことながら、主として地縁的・血縁的なコミュニケーション空間を形成する。それに対して、後者は結婚後しばらくの期間、結婚以前に形成していたコミュニケーション空間に志向される場合が多い。しかし、子供の成長に応じて、とくに小・中学校のPTAの加入によって、地縁的なつきあいが増大し、地縁的なコミュニケーション空間が集落内に形成されるようになる。

4) 週周期になると、A類型のコミュニケーション行動者も、集落外にコミュニケーション空間を形成する。近隣地区での消費行動や受療行動等を契機として、集落外での人びととの交流の機会が生じる。

5) 冠婚葬祭のような年周期のコミュニケーション行動は、本地区での居住年度によって異なってくる。また上記のような行動は、戸主が主体となる。冠婚葬祭の折には、集落内の地縁的・血縁的つきあいが、とくに居住年度の古い家族間に生じる。しかし、居住年度の新しい家族においても、地縁的な組織が存在し、擬制的な組織によって冠婚葬祭時のコミュニケーション空間が集落内に形成されている。

6) 年周期になると、近隣地区での親せきとの交流も生じる。当地区の居住者の入婚圏・出婚圏は一般に狭いため、近隣地区内に親せきをもつ者が多い。

7) 生産活動や余暇活動などの機能的組織の活発化によって、集落内のA類型のコミュニケーション行動者にとって、年周期のコミュニケーション空間が近隣地区外にも及ぶようになった。

B 型コミュニケーション空間の特性

1) 前述のように、B類型のコミュニケーション空間は、とりわけ日周期において、集落内にその中心が存在する。すなわち、就業地におけるコミュニケーション空間が重要である。

2) 集落外に就業する農外就業者は、週周期のコミュニケーション空間を、集落内と集落外の両者に有する。集落内には、生活組織による交流や幼少期からの友人が居住するため、週末にはコミュニ

ケーション空間が形成される。集落外には、職場でのつきあいが生じたり、生活行動が都市化するために、消費行動を主体として近隣地区にもコミュニケーション空間が出現する。

3) 年周期でみると、A類型と同様に、コミュニケーション空間が集落内、近隣地区内そして近隣地区外にも存在する。農外就業者の多くが戸主でないため、A類型と比較して、集落内でのコミュニケーション空間の比重は低い。それに対して、日々の就業地を集落外に有し、しかも就業の内容が非農業的であり、行動体系がA類型に属する者と比較して、より都市化しているため、コミュニケーション空間が拡大する。すなわち、A類型と比較して、近隣地区内外のコミュニケーション空間の役割が重要になる。

上記のように、大都市外縁部の農村地域におけるコミュニケーション空間の事例研究を実施したが、先に指摘したように都市化の進展に伴うコミュニケーションの多様化、コミュニケーション空間の拡大がみられる中で、依然として地縁的なコミュニケーションが根強く残っていることが確認された。兼業化、新旧住民の混住化の進展に伴って弱体化しつつある集落の共同管理機能、相互扶助機能の再構築を図るため、都市地域と同様なコミュニティ計画の必要性も指摘されている。このような実状を踏まえながら、コミュニケーション空間を中核とした農村のコミュニティ計画に関連するいくつかの事項を、次のように指摘することができよう。

i) コミュニケーション空間の類型で指摘したように、各主体によってコミュニケーションの種類、空間が大きく異なっている。主体間、世代間のコミュニケーションは、二世帯・三世帯家族が多いため、家族内では認められるが、地域社会では少なくなっている。このため、地域におけるコミュニケーション空間の拠点となっているゲートボール・クロッケー場、児童公園、集会所等のコミュニティ施設はできるだけ集合させ、自然な形で世代間交流の拡大が望まれる。

ii) 伝統的な大畑のからかさ万灯、祇園祭、新しく組織された球技大会、村民体育祭等には集落ぐるみの参加が認められる。通常、地域とつきあうことの少ない農外就業者や勤労婦人層、女性の老年層等も、このような時期には集落の一員としての意識が高まるという。上記のような集落ぐるみで参加できるうる行事をより一層活性化していく必要があろう。これに対して、子供会、ママさんバレー、PTA活動等の機能組織は、集落の活動から離れて関係する特定の人の活動となっており、また、若妻会、婦人会、農協婦人部等旧来の地域組織は十分機能していないものが多い。

iii) 集会施設については、大畑集落として、大畑本田地区に大畑田園都市センターが、大畑新田に集会所がある。このうち地区集会所は、女性や講など地縁的な活動での利用が多い。現在の施設では整備内容が不十分であるので、地域の活動に結びつく身近なコミュニティ施設の整備には積極的な行政的援助が望まれる。

iv) 女性老年層は、兼業世帯が多い中で家事の分担者として家庭の中での生活行動が主体である。したがって、健康管理や福祉面での施策においては、行政が地域に出向いた形での施策展開が特に重要となろう。

v) 青壮年層は農外就業者として、週日には村外の職場中心のコミュニティが、休日には家庭中の休養や村外での娯楽・買物行動が多く、地域活動への参加は少ない。地域の活性化には、このよう

な青壮年層の参加が重要な役割を果たすものであり、特に社会教育活動の面では、夜間・休日における行事の企画、参加要請が必要である。

vi) 農村地域には、今や共稼ぎ世帯が多く、近隣の企業に多くの婦人層が就業している。企業側も休暇・社員旅行や家族参加のバーベキュー大会・野球大会など福祉厚生面で地域と密着するような配慮をしている。勤労者福祉の視点から、健康管理まで含めた活動に対して、情報・資器材・施設の提供・指導者の派遣等企业と連携した行政施策展開の工夫も望まれる。

vii) 行政・コミュニティ情報の提供については、広報とともに情報提供対象者のコミュニティ空間に適合した媒体・経路を選択するなど細かな配慮も望まれる。掲示板の設置場所の選定、主婦層が集まる大型小売店舗等での広報、企業への連絡、男性老年層が集まるゲートボール場での広報等、情報内容に応じた工夫も有効であると思われる。

本研究をまとめるにあたっては、新治村役場、にいほり農業協同組合、小松崎 昭・鈴木春雄・田上 伝三氏をはじめ、大畑新田地区住民の方々のご協力を得ました。資料の整理・現地調査には、筑波大学研究生の山田浩久・松村公明両君の助力をいただきました。製図は、筑波大学の宮坂和人氏に依頼しました。この報告の作成にあたっては、文部省科学研究費補助金・一般研究C（代表者：高橋伸夫、課題番号61580200）を使用しました。以上記して感謝いたします。

注・参考文献

- 1) 北川隆吉監修 (1984)：現代社会学辞典、有信堂高文社、197～183。
- 2) 福武直他編 (1958)：社会学辞典、有斐閣、p72。
- 3) J. A. Jakle (1976)：*Human spatial behavior, a social geography*, Duxbury Press, 91～99。
- 4) 伊藤セツ他 (1983)：生活時間、光生館、40～45。
- 5) たとえば、繁樹義一 (1981)：土浦市における医療圏の構造、新地理 29-3, 10～23。高橋伸夫・南榮佑 (1981)：住民の医療行動に関する分析—茨城県出島村の事例—、東北地理 33-1, 35～41。
- 6) 上記の展望として、たとえば次の論文がある。生田真人 (1981)：人間行動研究の動向について—合衆国の消費者行動分析を中心に—、人文地理 33, 41～59。
- 7) たとえば、予察的研究例として、次の論文がある。高橋伸夫・高林清和 (1978)：浜松市における余暇圏の構造、人文地理学研究 II, 95～108。
- 8) 竹内郁郎 (1973)：社会的コミュニケーションの構造、内川芳美他編、現代の社会とコミュニケーション 1, 基礎理論、東京大学出版会、105～138。
- 9) 森川辰夫 (1981)：農村生活の構造、明文書房、p193。
- 10) 新治村史編纂委員会 (1986)：図説新治村史、p288。
- 11) たとえば、毎年1月15日に行われる集落総会の招集、春の地区対抗ソフトボール大会の開催、夏の祇園祭、鷲神社の「大畑のからかさ万灯」、秋の村民体育祭の実施、それに加えて評議委員会の開催等であり、その仕事量は膨大である。
- 12) 大関泰宏・高橋伸夫 (1984)：鉾田町中心市街地における人口移動に関する地理学的研究、地域調査報告 6, 85～104。
- 13) 外木典夫編 (1973)：現代日本の共同体 2, 家・家族、学陽書房、p133。
- 14) 喜多村俊夫・樽松静江・水津一郎 (1957)：村落社会地理 206～213。
- 15) 高橋伸夫・伊藤 悟・杉野光明・田上 顯・斉藤一彰 (1980)：出島村における生活組織に関する地理学的研究、霞ヶ浦地域研究報告, 2, 17～36。
- 16) 前掲10) p144。
- 17) 茨城県生活福祉部総合県民室 (1983)：いばらぎの祭りと民俗芸能、200～202。
- 18) 車で10分程の距離 (5 km) にある。他の世帯についてみても、入婚圏は一般に狭く、土浦市・石岡

市をはじめ、新治郡・筑波郡に限られている。また、村内婚や集落内婚もある。それゆえ、当地区の家族は親せきを近隣に持つことが多い。

19) 新治村内には19の分団からなる自治消防団組織がある。大畑集落は第3分団にあたり、団員は19名で構成されている。

Une étude géographique sur l'espace de communication dans la commune du Niihari (Préfecture d'Ibaraki, Japon)

par Nobuo TAKAHASHI, Akira TAGAMI et Kazuaki SAITO

Cet article se propose de mettre en valeur les caractéristiques de l'espace de communication dans des régions rurales au Japon. La commune du Niihari se trouve dans une région située à la périphérie de l'agglomération de Tokyo, à environ 60 kilomètres à vol d'oiseau de Tokyo. Dans cette commune l'urbanisation se développe très rapidement et par conséquent la plupart des gens ne travaillent pas dans l'agriculture. Les conclusions que nous pouvons tirer de cette étude peuvent se résumer brièvement de la manière suivante.

1. Les formateurs de l'espace de communication dans cette commune se divisent grossièrement en deux types. Le type A contient des vieillards, travailleurs dans l'agriculture, propriétaires de restaurants et des marchands de couleurs. Le type B comprend des non-agriculteurs (fonctionnaires, employés de sociétés etc.), charpentiers et camionneurs.

2. Les personnes de type A restent principalement dans la commune en semaine, leur espace de communication s'y limite. D'autre part, les personnes de type B, par le développement des moyens de transport et l'émergence de nouveaux emplois loin de commune, travaillent en dehors de la commune en semaine. Donc, ils ont deux espaces de communication : dans la commune et à l'extérieur, mais le premier est généralement plus petit que le second.

3. En week-end, les personnes de type A forment leurs espaces de communication à l'extérieur de leur commune à l'occasion de courses de la fréquentation d'hôpital etc. De la même manière, les personnes de type B possédant deux espaces de communication : dans la commune et à l'extérieur. Dans la commune l'espace social naît à l'occasion des relations avec ses amis et de la participation à l'organisation de la commune. Ailleurs, à l'extérieur de la commune, il y a des relations avec des collègues de travail, et ils vont faire des achats ensemble. Ce comportement est assez urbanisé, et cet espace de communication en week-end est assez vaste.

4. En cycle annuel, les gens de type A (surtout des vieillards, chefs de famille) forment leurs espaces de communication dans la commune aux travers d'événements familiaux (par exemple, mariage, funérailles etc.), parce que l'organisation locale de parenté y demeure encore vivace. Pourtant la municipalité et la coopérative agricole favorisent l'organisation de loisirs et l'espace de communication pour les gens de type A en cycle annuel s'agrandit graduellement.



写真1 新治村役場（1987年1月）

1955年7月に新治村が誕生したのちに、役場が当地に存在している。同役場の敷地内には、中央公民館・農村トレーニングセンターをはじめ、保健管理センターが建設中である。主として公的コミュニケーションの場として、役場が機能している。



写真2 鷺神社の境内（1987年1月）

当神社は旧大畑村の村社であった。大畑本田と大畑新田両地区が、この境内で「大畑のからかさ万灯」を毎年8月17日に主催する。この境内には自治消防団第3分団の詰所があり、消防団の会合の場にもなっている。

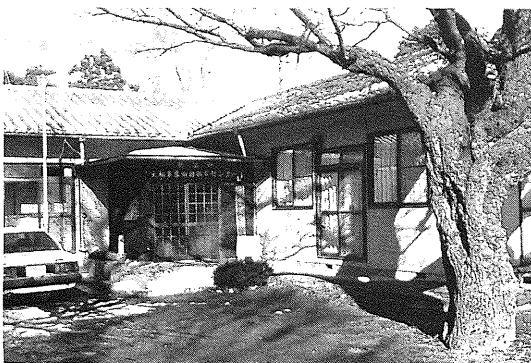


写真3 大畑集落田園都市センター（1987年1月）

同センターは鷺神社の境内にある。大畑集落の各種会合（大畑集落の総会・評議員会、土地改良区、婦人会など）の場となり、公的コミュニケーション空間の一つの核をなしている。



写真4 大畑新田集会所（1987年1月）

当集会所は大畑新田地区の所有・管理によるものである。地蔵講・念仏講など各種の講の会場として利用されるほか、農家組合や子供会などの会合の会場になるなど、地縁的ばかりでなく公的なコミュニケーションの場となる。



写真5 大畑集落のゲートボール場
(1986年11月)

大畑本田・大畑新田両地区の老人層がこのゲートボール場を使用する。週日には、午前8時から午後3時頃までゲームがなされ、老人層の重要なコミュニケーション空間が形成される。



写真6 大畑集落の児童公園(1986年11月)

1980年12月に竣工した児童公園であり、大畑田園都市建設事業の一環として建設された。この公園は、本地区の主として就学前の子供達の遊び場となっている。子守を介して、主婦・老人層のコミュニケーション空間としても、この公園が機能している。



写真7 大畑新田地区の集落景観(1987年1月)

当地区を東西に走る村道に沿って、集落の主要な家屋が路村状に並ぶ。この村道から南北に離れるに応じて、一般に入居年度の新しい世帯の家屋が配置されている。

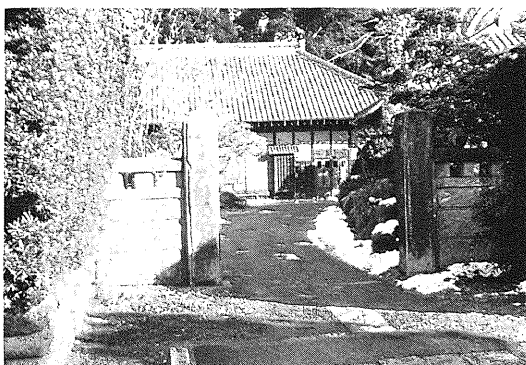


写真8 古い伝統的な家屋の景観(1987年1月)

本地区の開発は、江戸時代初期にまでさかのぼる。とりわけ自治組織の1班から3班までに属する世帯は、ほとんどが古い時代からの入居のものである。それらの家屋は、伝統的な形態を表出しているが、就業構成に非農業の比重が増大しつつある。

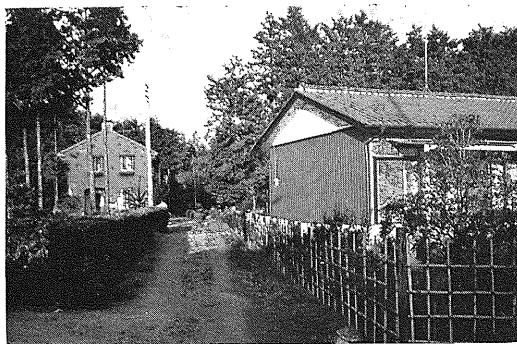


写真9 新しい家屋形態(1986年11月)

大畑新田地区の6班に属する世帯の家屋である。写真左手の家屋は、第二次世界大戦後の入居者によって新築されたものである。右手の家屋は、1984年に新たに入居した世帯のものである。両世帯とも農業就業者はいない。



写真10 酪農飼料(とうもろこし)の収穫(1986年11月)

大畑新田地区には、酪農家が2戸あり、そのうち1戸は専業農家であり、他は第1種兼業農家である。1960年代後半からの多頭飼育化が進むにしたがって、かつては8戸あった酪農家数も減少の一途をたどっている。

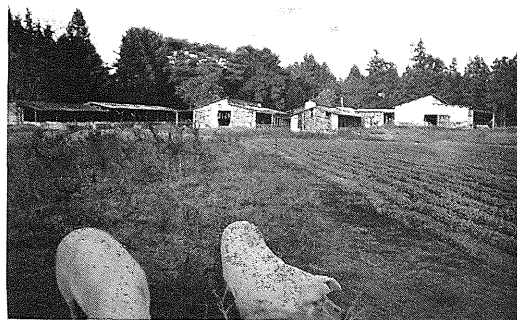


写真11 養豚農家(1986年11月)

大畑新田地区の南東部に位置する養豚農家の豚舎と運動場である。養豚業は新治村を代表する産業である。この専業農家以外に、本地区には、養豚農家が4戸存在するが、いずれも兼業農家である。



写真12 採種用陸稲の収穫(1986年10月)

大畑新田地区には、採種用陸稲を栽培する農家が8戸ある。ほとんどの栽培農家は、50代の男性基幹労働力をもち、経営面積は0.7〜2.5haであって、比較的大規模といえる。採種用陸稲は機械化を導入できるために、省力化作物の一つであり、しかも高収益が得られるために、当地区の特色ある作物である。



写真13 やなぎの栽培 (1986年11月)

生花に使用されるためのやなぎの栽培が、1960年代後半から当地区に導入された。やなぎが栽培される畑地は、かつては薬たばこや小麦などの普通畑からの転換が多い。やなぎも省力化作物の一つである。



写真14 芝生の栽培 (1986年10月)

大畑新田地区の北部にある芝畑である。この畑地には、かつて栗と桑が栽培されていた。この芝生を栽培する農家は、約3.5haの耕地を所有する。しかし、後継者は公務員のために、省力化作物の芝生の栽培が中心である。



写真15 耕作放棄地の拡大(1986年11月)

本地区の就業構造が変化するに伴って、土地利用の様相も変容してきた。とりわけ、農業労働力の集落外への析出により、耕作放棄地の面積が拡大しつつある。耕作放棄地は集落の縁辺部に多くみられる。

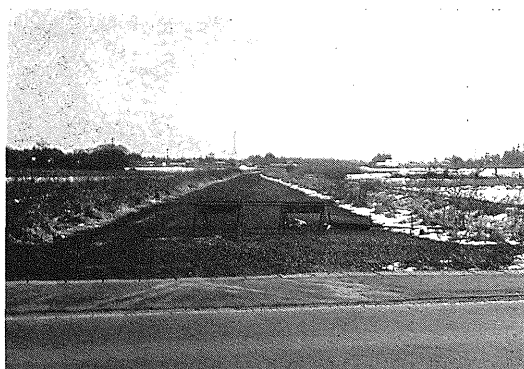


写真16 国道125号藤沢バイパスの工事現場 (1987年1月)

国道125号線の交通混雑を解消するために、工事が1986年初頭から開始された。工事完成の折には、このバイパスは国道6号・常磐高速道の土浦北インターと接合する。本地区の他地域との近接性は増大し、地域の変容はより急速になると予想される。